最硬の肉体を持つ一般人

放浪の焼きそば売り

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最硬の肉体を持つ一般人

【Ｎコード】
Ｎ６１２５Ｚ

【作者名】
放浪の焼きそば売り

【あらすじ】
耐久対魔対呪硬化ＥＸの転生者がいたらどうなるか、という私の興味で書く二次創作です

主人公設定（前書き）

主人公の設定です。
食人鬼書かなきゃ……

主人公設定

主人公名：玄武甲羅（げんぶごうら）
性格：基本的にのんびりとしており、温和で争い事は好まない
でもぷっちんするとどっかから鎖で亀甲縛りした直径約１ｍで約７ｋｇの甲羅で攻撃してくる。
原作知識はうろおぼえ
魔術回路もない。だが使っている甲羅が神の加護を受けている為、甲羅を使っての攻撃は当たる。
ステータス
筋力：Ｅ
耐久：ＥＸ
俊敏：Ｅ
幸運：Ｃ
宝具：？
保持スキル
硬化：ＥＸ
感想で指摘があったので急遽つけたスキル。攻撃を認識しなくても硬化して自身の身を守る。怪我もしないというお得
指摘してくれたお方に感謝
衝撃吸収：Ａ
投げられた卵も衝撃では割れない。
硬いからどっちみち割れる。
対魔力：ＥＸ
魔術？なにそれ美味しいの？状態。
魔術師涙目
対呪：ＥＸ
呪いなんてなかった。と言わんばかりのスキル。
アンリマユェ……

回復：Ｃ
常人離れした再生力。でも硬化ＥＸだからエヌマエリシュやられなきゃこのスキルは出番がない
えいえんのにばんて：ＥＸ
温和な性格故相手から攻撃を受けたりぶちぎれたりしないかぎり攻撃しない。
緑色の配管工と友達になれそうなスキル

主人公設定（後書き）

うひー今からプロローグ書かなきゃ
誤字あったら指摘してつかあさい
戦闘員一号様、耐久の指摘有難う御座います

プロローグですねぇ

ー主人公ー
「おやぁ、ここはどこでしょうか？」
見渡す限り真っ白ですねぇ。ここが死後の世界でしょうか。見たところ私一人なのでここで孤独に生きるのでしょうか。あ、もう死んでいましたね。
「あ、あの……」
おやぁ？先程まで私以外いなかった空間に人が……
「あなたも死んでしまったのですかぁ？どうやら今は二人だけのようなので私はここについての推測は終わったのでお話でもしますか？」
「あ、ああそのえーと……言いにくいのですが……」
「どうかしましたか？」
「すいませでしたああああああ！！！！！！！！！！！！！！」
おやぁ、凄いですねぇ。ジャンプした後その途中で土下座。見事なものです。
あれ………？私この女性になにかされましたっけ？うーむ、思い出せません。
「この度は本当に申し訳ございませんでした！！」
「ん~身に覚えがないですねぇ」
「なん……だと……！？」
某死神漫画の主人公の顔みたいになりましたねぇ……面白い人です。
「あ、あの！本当に覚えていないんですか！？」
「ん~死んだと思われる数時間前の記憶はあるんですけどねぇ。」
「え、ええと。その記憶がない時にあなたは殺されてしまったのです。」
「死因はなんですか~？」
「え！？えーと死因は……自然死です。」

「そうですか～死体はどうなりました？私は一人暮らしで山にある家に引きこもっていたので気になります。」
「死体は……食品に入れられている防腐剤が体に溜まり死後硬直で縁側に座ったまま腐らずに、仲良くしていた野生の動物以外は１０年間誰も気付かずに放置されていました。」
そうですか、森のみんなは気付いてくれましたか。
「動物達は大丈夫でしょうかねぇ、時々餌を上げてましたが……」
「じ、自分が何故２０代の若さで自然死したのか気にならないんですか？」
「２０代で死んでもそれは自然の摂理ですからねぇ」
それにしてもなんで２０代でこんなに老成したんでしょうかねぇ
「そ、そうですか……あ、実はまだ死ぬべきではなかったので転生して頂きたいのです……」
転生……輪廻転生の類でしょうか。……そういえば
「あなたは誰ですか？私は玄武甲羅です。」
「あ、これはご丁寧に……神の一柱のアマテラスです。……ってちがーーーーう！！！！！！！！！！！」
なぜ吠えているのでしょうか……熊の滝太郎（５歳♂　を思いだしますねぇ
いやぁ、親とはぐれたあのこを育てるのは大変でした。私が２３歳の頃に……
「あなたには転生してもらいます！それとチートもつけます！」
ち、ちぃと？ああ、私がまだ高校生の時に聞きましたねぇ。あの時はくろれきしが多かったですねぇ……野良猫に富士山とつけたり、野良犬にお米とつけたり。ああ、そういえば釣った鰒にイワナとつけましたねぇ……
「き、聞いているんですかぁ！？」
「聞いていますよぉ。只昔を懐かしく思っているだけですよ。」
「……２８なのになんでこんなに枯れているんですかあなたは……
……」

「なんででしょうかねぇ……」
「もういいです。それでチートですが」
「あらゆる攻撃とかをくらってしまっても大丈夫な肉体が欲しいですねぇ。滝太郎と遊んでいる時に怪我をしてしまいましたし。」
「わかりました（多分ＥＸ級でやっと切り傷やしもやけ、やけどになって魔力とかを無効化、衝撃を吸収する肉体が欲しいんですよね……）」
「？」
なにかとんでもないことになりそうですが……まあいいです。
「おまけに武器でもあげます。暴走した動物を鎮静できるように」
「ん～でしたら鎖がいいですねぇ。前に滝太郎が暴れた時に縄では抑えることができませんでしたから。」
「はい、わかりました。それではよい世界を」
「第二の人生ですか。楽しみです。」
「あ、テンプレで穴が開きます。」
え？
パカッ
「なんということでしょおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ……」
「匠の技で見事に落ちていきました……って何を言ってるんですか私は」

プロローグですねぇ（後書き）

劇〇ビフ〇ーアフターが作者は好きです
そういえばアフターのときに流れるピアノの曲の名前はなんでしょうかね？私は知らないのです。

修正しました。えぞくろてん様、ご指摘ありがとうございます。

つきましたねぇ（前書き）

通知表……3が4つしかありませんでした。
あと全部2って……高校、大丈夫かな

つきましたねぇ

「……おおおおおおおおおおおおおお！！
いたっ！
な、なんで穴なんでしょうか……それに何故私は怪我を……ああ、そういえばがんじょーな肉体（からだ）をもらったんだした。この年で物忘れは勘弁してほしいですねぇ。」
ころころと笑い自分が今どこにいるのか玄武は推測する
（ここは……見たところ森でしょうね……。ですが動物の気配がありませんね）
森で動物の気配がない。というのはおかしかった。たとえ冬で冬眠していても微かな気でわかる。
（ああ、雪ですねぇ。私のところでは雪が多く積もって大変でした。）
しかしそこで違和感
（はて、何故寒くないのでしょうか。）
そう、寒くないのだ。死んだ時に秋とはいえ服は冬では寒いだろうと思われる服なのに
（甘寺素（アマテラス）さんのおかげでしょうか。これはありがたいです。）
この男、神話は全く知らないのだ。おまけに山で籠もって自給自足の生活をしていたため機械類に疎い。その疎さはどこぞのうっかり並みだ。
「そこにいるのは誰ですか！！ここに何の用だ！！」
「おやぁ？」
声をした方を見ると黒一色の服を着て何か武器を構えてるように見える少女がいた。
「私は玄武甲羅ですよぉ」
「何をしにきたかを言いなさい！！」
「ん～森の気配を探っていました。」

「ッ！貴様マスターか！！」
「ま、ますたー？」
「惚けても無駄だ！！」
そう言い切りかかるようにくる少女。
そして不可視の剣が玄武に直撃する。
「ボケてないですよぉ。まだ私は２８歳です。それと、今の音と私の頭の何かが当たったようなのは何ですか？」
直撃するが無傷。しかも攻撃されたことに気付いていない。
「ッ！？」
少女はうろたえたがやはり歴戦の騎士。すぐに思考を回復させて次の攻撃を行う。
「風王鉄鎚（ストライクエア）！」
（この男はおかしい。何の魔力もないのに私の剣を受けきったことが。ならばここは一時引いて……）
そして空気の塊は玄武に当たり
「？」
霧散した。
「そ、そんな……」
ここで黒服の女騎士の直感が働く。
（この男はおかし過ぎる……エクスカリバーを受けきったりストライクエアを霧散させたり……メイガス（魔術師）か？だが演技には見えない。）
「あの、あなたはメイガスではないのですか？」
「めいがす？なんですかそれは」
「そうですか。ではここに来た理由は？」
「森に動物の気配が一切なかったので気になって来たんですよぉ。」
「やはり……一般人でしたか。」
「？ところでその剣はぁ？さっき持ってなかったようにみえましたがぁ」
「え！？ああこれは……そ、そう手品です！！」

「ほへぇ～すごいですねぇ……」
（あ、危なかった。もしこの男が頑丈でなければ一般人を殺してしまうところでした……）
「ところで、森を抜けるにはどうしたらいいのでしょうかぁ？」
「へっ？こ、こっちです。」
「有難う御座います。」
（これは無視されていても切継に報告した方がよさそうですね……）
「（マスター、一般人が森に迷いこんでいたので森の外へ案内します。）」
「（……）」
（やはり無視ですか……）
騎士の少女とそのマスターの溝は深くなっていく……

つきましたねぇ（後書き）

最初英霊にしようかと思ったんですが……一般人なので一般人のままいこうと決めました。
食人鬼の方もちゃんと投稿します。
誤字があれば報告してください。

修正しました

衛宮さん視点ですねぇ（前書き）

一般人（サブ）が食人鬼（メイン）のお気に入り件数越えました。

……泣こう

衛宮さん視点ですねぇ

ーペロリSゲフンゲフン…
ー某テロリストー
有り得ない……魔術師でもないのにセイバーの一撃を受けきった……！？
本当にサーヴァントではないのか……？
それに攻撃されたことに気づいていないなんて……いや、僅かに攻撃される前に顔をしかめた。
殺気を感じてはいるようだ。

こんな一般人がいるのだろうか……結界の外側でかかったのではなく内側で反応した……。つまり何もない空間からそこに現れた。魔法使いか？いや、魔力は感じない。

……止めだ。この男は謎過ぎる
サーヴァントの攻撃を無効化するなんて封印指定並みだ
危険なものは早めに……

「ねぇ切嗣、どうしたの？」
「なんでもないよ、イリヤ。お、またクルミを見つけたぞ。」
「え！？どこどこ！？」
「あはは、あれだよ、あれもクルミの一種。でも食べることは出来ないんだ。」
「むー！切嗣ずっとズルしてたぁ！！」
「はは、ごめんよイリヤ」

「（マスター、一般人が森に迷い込んだようなので森の外に案内してきます。）」

セイバーから念話がきた。でも僕は

「（……）」

無視した。道具に感情はいらない……。

衛宮さん視点ですねぇ（後書き）

行間をあけたほうが読みやすいとありましたのであけてみました。

読みやすくなってでしょうか……？

切継さんを切嗣さんに修正しました。

倉庫街ですねぇ……（前書き）

一般人の感想数が食人鬼を越えた……

ゴファッ（吐血

倉庫街ですねぇ……

ー主人公ー
黒スーツ（※セイバー）さんから森の外へ案内してもらったのはいいんですがぁ………

「ここ、どこでしょうかねぇ。」

絶賛迷子中です。

数時間後
～～

本当にここどこでしょうかぁ。
お金がないので食事出来なくてお腹がすきました……
働きたいで御座るぅ、働きたいで御座るぅ……。

おやぁ?、ここはどこでしょうか……?
どうやら倉庫……がいっぱありますねぇ。
むぅ?なにやら防御率が二段回低くなりそうな金属音が………

ーランサー&セイバーー
ちょっと時は遡る
「よくぞ来た。今日一日、この街を練り歩いて過ごしたものの、どいつもこいつも穴熊を決めこむ腰抜けばかり。……俺の誘いに応じた猛者は、お前だけだ」
低く、嬉々とした声で讃える二槍の男……ランサーのサーヴァント

は、自然体でその猛者に問い掛ける。

「その清涼な闘気……セイバーとお見受けしたが、如何に？」
「その通り。そういうお前はランサーに相違ないな？」
「如何にも。……フン、これより死合おうという相手と尋常に名乗りを交わすこともままならぬとは。興の乗らぬ縛りがあったものだ。」

ランサーの言葉にセイバーも顔を弛緩させた。同意見のようだ。

「是非もあるまい。もとより我ら自身の栄誉を競う戦いではあるまい。お前とて、この時代の主のためにその槍を捧げたのだろう？」
「ふむ、違いない」

ランサーは苦笑する。
これから殺し合うようには聞こえないが実際は殺気が飛び交っている。サーヴァントの殺気を耐えれるアイリさん何者。

「我が主に勝利を捧げるべく、こうして好敵手が来るのを待っていたが、招きに応じたのが最良と名高き剣の英霊とは僥倖だった。」
「ほう、尋常な勝負を所望であったか。誇り高い英霊と相見えたのは私にとっても幸いだ。」

お互いに笑みを浮かべ、戦闘体勢へと移る。
ランサーは己がエモノの二槍を構える。
それは不死鳥が翼を広げる姿を幻視させる。
セイバーも黒のスーツから愛用の白銀の鎧へと早変わりする。その手には不可視の、魔力で包まれた聖剣が握られている。

「それでは……いざ。」

ー主人公ー
な、なにやら物騒な雰囲気にぃ～…。
止めた方がいいのでしょうかぁ……ってあそこに別のヒトkもとい人影が……。
……ポケモ〇ネタ多いですねぇ。

……むさいおっさんと女の子に見える男の子のペアって誰得なのでしょうかぁ……。
「あのぅ～」
「おわっ！？」
めっちゃ吃驚されました。こっちが吃驚しましたよぅ。
「おう？坊主、いつからおった？」

ぼ、坊主……私はこれでも２８なのですが……それと私は存在感があまりないのでしょうか……。

「ついさっきですよぉ、道を聞きに来たのともうひとつ聞きたいことがあるのですが……。」
「ほぅ、その質問とはなんだ？」

い、威圧感が凄いですねぇ、歴戦の戦士そのものです。

「あの人達は一体何故殺し合いをしているのですか？」

それをいうと某蛇傭兵の声の男はキョトンとした顔のあとぶわっはっはっはと笑いました。
なにか……変なこと言いましたかね？

「ああすまん、警戒していた余が馬鹿らしくなってな。」

「あ、暗示が効かない……？」
「そ、そうですかぁ……。ところで少年は何をしようとしているのです？」
「い、いや何にも……（まさか一般人！？なんでこんなところに！！）」
「おっどうやらランサーが宝具を使うようだぞ？」

そして騎兵とそのマスターとおまけの一般人は二人の戦いにどこぞの隣の晩御飯番組のように突撃する

倉庫街ですねぇ……（後書き）

ドスやってて思ったんですがラオシャンロンってどうやって生殖するのでしょうか

安西先生、出番がないです。（前書き）

ちょ……ユニークが約2日で1万9千越え……！？

夢？

安西先生、出番がないです。

『戯合いはそこまでだランサー』
静寂を破った冷淡な声が響く。
「ランサーの……マスター……！？」

驚きと共にアイリスフィールが辺りを見渡すが人影はない。どうやら遠距離から遠見をしているようだ。
穴熊を決めこんでるのはランサーのマスターも同じではなかろうか。

『これ以上勝負を長引かせるな。そのセイバーは難敵だ、速やかに排除しろ。宝具の開張を許す。』
「了解した。我が主よ。」

マスターへの返答が終わると共に急激に殺気を研ぎ澄ませるランサー。

そして構えを改め、左手の短槍を放り捨てた。
その行動に動揺したがセイバーは平常心を取り戻し右手の宝具を凝視する。
長槍に巻かれた呪符がぺりぺり……と剥がれていく。

剥がれていく様を見ているとそれを自分も剥ぎたくなってくる自分は異常だろうか。
閑話休題

呪符が剥がれ現れたのは、穂先から柄まで赤い真紅の槍。その穂先から禍々しい魔力が揺らめいている。

「そういうわけだ。ここからは殺(と)りにいかせてもらう。」

そう低く呟き、ランサーは先程までの鳥のような独特な構えとは違い、セイバーも見慣れた構えをとる。
同時にセイバーも構え直し、先程以上にランサーの動きと槍に注意を向ける。

宝具の効果の発揮は大きく分けて二つである。一つはセイバーのもつエクスカリバーのように真名開放とともに爆発的な威力をもつタイプ。
そしてもう一つは武器自体に宝具としての能力が付加されたタイプである。
こちらのタイプは一撃必殺としての威力が欠けるが、常に効果を発揮するため戦闘で優位に進めることが出来る。
第5次聖杯戦争のバーサーカーの十二の試練がそれである。

セイバーの見立てではあの槍は後者。次で決めるという気迫が感じられないため、引き続き戦闘を続行して此方を仕留める腹づもりだろうと。

先に動いたのはランサーだ。二槍の時とは違う正道の突き。愚直なまでの突進をセイバーは剣で受け止める。が。

「な！？」

槍の穂先と剣がぶつかった瞬間、剣に纏っていた風が剥がされ、突風となり両者の足場を崩す。

「晒したな、秘蔵の剣を」
「……」

ニヤリと笑うランサーに解せないという沈黙するセイバー。ここで攻撃しないランサーはやっぱり騎士である。

「刃渡りも確かに見て取った。これでもう見えぬ間合いに惑わされることはない。」

宣言と共にランサーが先程とは比べものにならない程の勢いでセイバーに次々と突きを繰り出す。

セイバーも自らの獲物で槍を捌くが。

徐々にに焦りが顔に浮かんでくる。理由はわからないが真紅の槍と自分の剣で打ち合うたびにインビジブル？エアが乱れて剣の姿が暴かれるのだ。

だがこの程度でひるむことはない。

セイバーはランサーの突きやなぎはらいの中に比較的浅いものが混じっていることを気づいた

これならば己の鎧で防ぐことができる。

そう判断し、セイバーは袈裟斬りのカウンターの一撃を繰り出した。

鮮血が舞う。

だが怪我を負ったのはセイバーだ。

直感に身を任せ体をひねった。それは正解である。ランサーの槍はまるで無いかの如く貫いた。

ゴロゴロと地を転がり距離を取る。

立ち上がって構える。その脇腹には浅いが槍による一撃が刻まれていた。

「セイバー！！」

アイリスフィールがセイバーに近づき治癒魔術を掛ける。

「有難う御座いますアイリスフィール。治癒は効いてます。」

どうやら痛みは残っているらしい。

「やはり易々と勝ちを獲らせてはくれぬか……。」

そうランサーは言うがその顔に苦渋の色はない。むしろ良くよけたと喜悦の表情を浮かべている。

直感で致命傷をさけることができたセイバーは一つの答えに辿りついた。

……あの赤い槍の能力は、おそらく魔力の破壊。

それならば先程インビジブル？エアを無効化されたのも、自身の鎧を苦も無く貫いたのも納得できる。

打ち合いで、破壊することができるのは。穂先のみのようだが。サーヴァントの戦いに魔力のない戦いはありえない。各々の魔力量が戦闘に重大な影響を与える聖杯戦争では極めて有用性の高い宝具だろう。

……どこぞの漫画ではハリセンだったりするが。

ならばと思いセイバーは鎧を散らす。

鎧が意味を成さないのならばその分を自身のスキル「魔力放出」につぎ込み、身体強化した方がいいとセイバーは判断した。

「その勇敢さ。潔い決断。決して嫌いではないが……この場に限って言わせてもらえば、それは失策だったぞセイバー。」

「さてどうだか。諌言は、次の打ち込みを受けてからにしてもらおうか。」

そしてセイバーはランサーに突貫する。

安西先生、出番がないです。（後書き）

ｄｓでは４００字しか書けないという罠。
うぼぁ

あれ、また出番無しですかぁ？（前書き）

宗教で２３の５：００から２４の５：００まで滋賀に行ってました。
移動の時一人「ドキドキ☆八時間耐久！乗り物酔いで吐くのをいつまでもつかな☆」をしていました。
あ、そうそう、バスの中で塔の上のラプンツェル見ますた。
マキシマム高性能すぐる

あれ、また出番無しですかぁ？

再び蝶の如く舞う血飛沫。
互いに傷は負った両者は距離をとる。
セイバーは直感で身を捻り串刺しを避けることができたものの、完全にはよけることはできずに左腕にランサーの放り捨てられた短槍で傷を負った。
ランサーもセイバーが体勢を崩したことにより必殺は避けることができた。
どちらも負った傷は浅い。
ランサーは時間を巻き戻すが如く高速で傷が塞がるが、セイバーはアイリスフィールが治癒魔術を使用しても左腕の傷は塞がらない。

「我が『破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）』が前にして、鎧が無為だと悟った迄はよかったな。が、鎧を捨てたのは早計だった。そうでなければ『ゲイ・ボウ（必滅の黄薔薇）』は防げたものを。」
最早隠すこともないと己の宝具の真名を明かす。そして次に見せたかまえは戦闘開始時と同じ二本の槍の彼が生涯をかけ修得した二槍流の構えであった。
魔力を打ち消す紅槍と決して癒やさぬ傷をつける黄槍。
ここまでくると断定出来る。アーサー王伝説にも関わりのあるケルト神話に綴られるその英雄の名前は……。

「成る程、もっと早くに気づくべきだった……。フィオナ騎士団、随一の戦士……“輝く貌”のディルムッド・オディナ。まさか手合わせの栄に与るとは思いませんでした。」
「何、誇れ高いのは俺の方だ、セイバー。
かの名高き騎士王と鍔競り合って、一矢報いるまでに至ったとは…フフン、どうやらこの俺も捨てたものではないらしい。」

真名を知られてもランサーの表情は清々しいものであった。互いの名が分かった今、ようやく騎士として尋常な勝負が始めることができる。
だが対照的にセイバーは内心で歯噛みをせざるをえなかった。左腕に受けた治癒不可能ではあるが浅い傷。だが左手の親指が動かない。腱をやられたのだろう。
これでは彼女の切り札であるエクスカリバーを使うことができない。両手で満足に握ることが出来なければ発動の反動に耐えることができずに後ろへと飛んでいってしまうのだ。
金の大筋の光を剣から出しながら飛ぶ少女。
……シュールである。

だがセイバーの闘志には微塵の揺らぎもない。むしろ終戦でこれだけの強敵と対峙したことで、益々の昂りを見せている。
そしてその闘気はランサーにもとどいていた。セイバー同様、生粋の騎士であるランサーもこの状況でなお全く戦意の衰えないセイバーに畏敬と歓喜を感じているのだ。

「覚悟しろセイバー。次は獲るぞ。」
「それは私に獲られなかったときの話だぞランサー。」

二人共壮絶な笑みをうかべ、間合いを詰める。機を伺い合うことで生まれた静寂は、冷たく緊迫した空気を作り出していた。
駄菓子菓子(だがしかし)。
雷鳴が響き二頭の逞しく美しい牡牛にひかれた戦車(チャリオット)が紫電をスパークさせながら空を駆けてくる。蹄と車輪が空中を蹴る度に大気が震える。
これ程の圧力は宝具以外ありえない。
そして雷電を纏った戦車はランサーとセイバーの中間に降りたった。

着地と同時に紫電は収まり、御者台に乗る巨漢があらわになった。

「双方、武器を収めよ。王の御前である。」

突如響く大音量。戦車を駆っていたであろうその男から発せられた声は物理的な圧力を伴い周囲に響き渡る。

だがランサーもセイバーも名にし負う兵。この程度では怯みもしない。

両者とも油断なく偉丈夫を見据える。

「我が名は征服王イスカンダル。此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した。」

瞬間、一部のぽわぽわしたところを除き再び静寂に満ちた。

あれ、また出番無しですかぁ？（後書き）

オリ主のモデルはプーさんです。
日ランキングの連載で１０位だったのにびっくらぎょうてん。
まだ乗り物酔いが残っているのかと思った

外伝　仕事人「サンタクロース」（前書き）

サンタクロース
それは赤い外装を身に纏うもの
サンタクロース
それは沢山のプレゼントを与えるもの
サンタクロース
それは気配遮断をし子供の部屋へ侵入するもの
サンタクロース
それは子供の欲しいものを感じとり欲しいものを用意するもの
サンタクロース
それは白い袋を持つもの
サンタクロース
それはトナカイのひく轎に乗るもの
サンタクロース
それは仕事人だった……

外伝　仕事人「サンタクロース」

「こちらサンタα、β、応答願う。」

「こちらβ。α、プレゼントの用意は出来たか。」

「ああ、ばっちりだ。あとはこれを日本（ジャパン）の子供達にプレゼントしたら任務完了（ミッションコンプリート）だ。」

「俺はアメリカか………よし、α。俺は先に行くぜ。「赤鼻のトナカイ（レッドデッド）」号のサンタβ、発進準備！」

ガコ、ウィィィィィン………ガション。

「発進！！」

ギュボッ！ドゥウゥン！！

「ふー気合い入ってんじゃねかβのやつ俺も行くか……α行きまーす！！」

ドゥウゥン………

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ドドドドドド……

「ここが日本（ジャパン）か………平和だ。俺達の所もこれだけ平和だったら……っておおっといけねえ。見逃すとこだった。」

αの視線の先、そこには少年がいた。
少年は安心しきった顔で寝ている。
「へっ、さぁて。「お仕事開始（Ｌｅｔ｀ｓ　Ｐａｒｔｙ　Ｔｉｍ
ｅ）」！」

「（はっ、これぐらいはお茶のこさいさいだ……。）」
気配を消し家へ近づく。そして防犯用の点滅ライトがあったがそれ
をクリアー。

そして狭範囲強力磁力を使い窓の鍵を開けて侵入する。
「（さぁて、少年君の願いは一体なんだ？）」
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「あと最後の一人だぜぇ〜。あーっと場所は山奥だぁ！？」
地図には確かに山奥を示している。
「ちっどうやらやるっきゃねーようだな……。
さぁ、姿の分からぬ人物よ。首洗って待っていな……」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「（ハァ……ハァ…ハァ……日本（ジャパン）の子供は化け物か！？
俺が侵入した瞬間目を覚まして迎撃するなんて……！？）」
「逃がしませんよぅ〜」
「いいいい！？」
冗談じゃない！あんなのにかまってられっか！

俺はすぐさま己の相棒であるトナカイ４頭と轉を具現化させて。

「ハァ！セィヤッ！」

走らせる！

ただ走らせるだけじゃあねえ。こいつは空中を走るんだ！！

あのガキまだ追ってきてないよな……

よし、あそこで止まっているな。ふぅ……

ほんと散々な１日だったぜ。

まあこれだけは言わせてくれ。

メリークリスマス！

ー主人公（幼少期）ー

むぅ、逃がしてしまいましたねぇ。

次こはもらいますよぉ。クスクスクスクスクスクスクスクスクスクスクスクス。

外伝　仕事人「サンタクロース」（後書き）

何故か思いついた即席クリスマス小説。
ｐｖが１０万を越えました。
ありがとうございます！

す、すないぱぁ！？（前書き）

え……合計ｐｖ２万……？

え？え？ちょまっ、え？

す、すないぱぁ！？

ー主人公ー
やぁっと出番というか喋ることができますねぇ。
ふふ、出番がなくてすねている今の私の状況は某夢の国の鼠風だと『閉園時間を過ぎても残っている悪い子はだーれだ！ハハッ！』なのですよぉ。

「なにしてくれやがりますかこのお馬鹿！」

あ、少年がデコピンされましたねぇ。
あれは痛そうです。
あ、黒スーツさんが私に気づきました。「え、なんでいんの？ほんとマジなんでいんの？」って顔ですねぇ。
本当になんでいるんでしょうか私……。

「しかもっ！！なんで一般人を連れてきたんだよぉ！！！！！」
「あーそれはだな。ノリだ。」
「ノリで神秘をバラすなぁぁぁ！！」

カルシウムが足りていないのでしょうかねぇ？少年は怒りっぽなしです。

「少年、鰯煎餅食べますかぁ？美味しいですしカルシウムもとれますよぉ」

どこから取り出した鰯煎餅を少年にすすめます。
あれ、本当にどこから出したんでしょうかぁ？

「え？……ああ、ありがt……ってちがーーーーーーーーう！！」
おお、ノリツッコミです。
んーでしたら。
「いすかんだるさんカロリーメイト食べます？」
「む？なんじゃあこりゃあブロック状だな……」
そう言いながら食べるいすかんだるさん。
そして……！
「おお！、美味いなこれは！」
中の人ネタ……来ませんでしたねぇ……
あと黒スーツさんこっちガン見してます。
あ、女性から涎がでてると注意されています。
食べたいのでしょうかぁ……？
「貴女も食べますかぁ？」
「え！？え、ああ、いや、しかし……」
黒スーツさんは悩んでます。あとカロリーメイト。あなたどこから沸きました。
あ、そうだ。
「そこのいけめんさんもいかがです？カロリーメイト。」
「俺は結構だ。敵か味方かどうか分からんものから食料は貰わない。」
「むー、そうですかぁ……」

がっかりとしてもとの位置に戻ります。この乗りもの私の身長（157）ではよじ登らなければいけないので大変です。
……黒スーツさんからなんだか餌を求める子犬の様な目をむけられてますが全力で無視します。
そのとき「パァン」という音がしました。
あ、頭が痛いですぅ……。
私はなにがあたったのか見てみると……
銃弾？ほへー私命狙われて……
ひぃぃ！？じゅ、銃弾！？
す、すないぱぁがいるのですかぁ！？
あ、あわわわわ……
ー三人称ー
あわわと言いながら混乱する玄武をみてここにいるもの全てが多少の差異あれどこう思った
「「「「「「（なんで銃弾くらっても平気なんだよ……）」」」」」」
一瞬にして戦場がほのぼのとした空気に包まれた。

す、すないぱぁ！？（後書き）

今日も主人公の周りは平和です　まる。

外伝　もうすぐでお正月ですねぇ（前書き）

もうちょいで正月です。
あ、年賀状書いてない……
今回は玄武と私の会話です。
本編とはあまり関係がございません。
今年最後の投稿です。

外伝　もうすぐでお正月ですねぇ

玄武（以下玄「こんにちはこんばんはおはようございます。略しておはこんばんちはですよぉ。」
なんでおはようが最後なのか激しく気になるけど無視！ささっとすすめるべ。
玄「この小説では殆どのことが“大半アマテラスのせい”で片付きますからねぇ。」
アマテラス哀れすぎる。
話は変わるけど玄武、今年の年越し蕎麦は誰と食べるんだ？
玄「白虎と青龍と朱雀と麒麟とで食べます。」
あれ……一人多くね？
四獣だよね？なんで五？
玄「知らないのですかぁ？中央にも存在してるんですよぉ。因みに麒麟は聖獣の中で一番強いんですよぉ。」
うぐふぅ。つかその設定今出していいのか。
玄「いいんですよぉ。どうせ貴方が苦しむんですし。」
黒い！黒いよこの子！２８歳性別男なのに子扱いはきついけど。
玄「そーいえばなんで私が５人組の中で一番背が低いんですかぁ～。」
ちょっ！？がくがく揺らさんといて！！出ちゃう！！胃液出ちゃう！！
それと低いのはそうしないと青龍（２ｍ３０ｃｍ）によじ登れないでしょ！！
玄「むぅ……青龍の頭に登れないのは嫌です。」
でしょ！！だから離し……うげるぽっ
玄「む！汚いですよぉ～。」
誰の……せいだと思って……。
玄「私ですよぉ♪」

全くこのエターナルショタは……。
あ、そういえば。
玄「どうしたんですかぁ？」
お前さんの容姿……書いてなかったわ。
玄「む、それはゆゆしき問題ですよぉ。」
じゃ、玄武の容姿説明。
髪は赤銅色、髪型はぼさぼさで肩につくぐらいの長さ。
服装は茶色のタートルネックとぶかぶかのホラ、なんていうか……DQの布のズボンを長くしてずりずりぐらいなやつ。
玄「服について全然興味が無いことが仇になりましたねぇ。」
わっちファッションに興味なぞないもーん。
玄「でも調べくれないといつまで経っても服のデザイン決まりませんよぉ？」
そーだけどさー。って正月の話なのにずれよったあー危ない。
玄「（むぅ、逃げましたか。）」
年が明けると初詣とかで神社の人達は大変だろうな。
玄「朱雀のところが神社だったので私を含めた四獣と中央の麒麟とで手伝いに行きますねぇ。何故か青龍がいたら参拝客が青龍から離れてしまいますが……。」
（そらでかいからな……）じゃあ手伝いの意味無くない？
玄「ところがぎっちょん！私がよじ登っているとお客さんが戻ってくるのです！」
（どこのハニー先輩とモリ先輩だよ……。）
他は？
玄「麒麟と白虎は売り子さんですよぉ。朱雀は神主さんをやってますよぉ。」
（……やろうと思えば星破壊出来る連中が売り子て、神主て、客寄せパンダておい）
玄「む？どうやら文字数が限界に近いようですぅ。」
あらまほんと。

それでは皆さん。
玄「よいお年をぉ～。」

金ぴかですねぇ（前書き）

あけましておめでとうございます。
今年もよろしくお願いします。

金ぴかですねぇ

ー優雅な時臣氏ー
「時臣、我(オレ)はあの雑種に興味が湧いた。」
「は……？」

いきなり何を言い出すのでしょか我が王は……。

「我が王よ、あの人間は得体の知れぬモノなのですぞ！」
「だからどうした？我に時間をとらせるな時臣。」
「ッ！……分かりました我が王。お気をつけて。」
「ふん。」
バタン

「……」
「……暇だ。」

ユウガーン

～倉庫街～
あわわはわわとどこぞのギャルゲーの武将のように慌てる玄武を除き、また空気はシリアスに包まれそうになっていた。

『そうか、よりによって貴様か。』

怨嗟に満ちた声が広がる。
声の主は未だ姿を見せぬランサーのマスターである。
その声はランサーに命令する時とは違い憎悪が込められていた。

『一体何を血迷って私の聖遺物を盗んだと思ったが……。よりにもよって自身が聖杯戦争に参加する腹だったとはねぇ。ウェイバー・ベルベット君。』

名を呼ばれたウェイバーは声の主が誰だったのか理解して震えあがった。

声の主は時計塔の筆頭講師にして今回のマスター内で“魔術師”として最高の実力を持つケイネス・エルメロイ・アーチボルトだ。

『残念だ、実に残念だなぁ。可愛い教え子には幸せになってもらいたかったんだがね。ウェイバー、君のような凡才は凡才なりに凡庸で平和な暮らしを手に入れられた筈だったのにねぇ。』

嘲りと侮蔑を含んだ声にウェイバーは何も言い返すことができない。自分はこの高慢で傲慢で慢心な講師を見返すために聖杯戦争に参加したのに、初めて感じた殺気で身をすくめてしまった。

『致し方ないなぁウェイバー君。君については、私が特別に課題授業を受け持ってあげようではないか。

魔術師同士が殺しあうという本当の意味、その恐怖と苦痛を教えてあげるよ。光栄に思いたまえ。』

あまりにも傲慢、だがウェイバーには何かする余裕はない。魔術師の“死の宣告”というものを直で感じたウェイバーにはただ恐怖に打ち震えることしかできなかった。……だが、突如彼は自身の背に大きく暖かいものを感じた。ライダーの手だ。

「おう魔術師よ。察するに貴様はこの坊主に成り代わって余のマスターになる腹だったらしいが、だとしたら片腹痛いのぅ。

余のマスターとなるべき男は、余と共に戦場を馳せる勇者でなければならぬ。
姿を晒す度胸さえない臆病者なぞ、役者不足にも甚だしいぞ。」
『……。』
ケイネスは答えない。が姿の見えぬ彼から怒りの波動だけは沈黙が下りる中でも十分感じられた。
「おいこら！　他にもまだおるだろうが。闇にまぎれて覗き見をしておる連中は！」
その言葉に全員が怪訝な表情をする。アサシンは遠坂邸でアーチャーに倒されているため。覗き見している線は薄い。
「どういうことだライダー？」
セイバーがライダーに聞いた。
「セイバー、それにランサーよ、うぬらの真っ向切っての競い合い、真に見事であった。あれほど清澄な剣戟を響かせては、惹かれて出てきた英霊が、よもや余たちだけということはあるまいて。」
どうやらライダーの発言は、未だに姿を見せない……残りのサーヴァントに向けてのものらしい。辺り一面に豪快な宣言が響き渡る。
「情けない。情けないのぅ！　冬木に集った英雄豪傑どもよ。このセイバーとランサーが見せ付けた気概に、何も感じるところがないと抜かすか？　誇るべき真名を持ち合わせておきながら、コソコソと覗き見に徹するというのなら、腰抜けだわな。英霊が聞いて呆れるわなぁ。んん！？」

すっごい挑発している。

「聖杯に招かれし英霊は、今！　ここに集うがいい。なおも顔見せを怖じるような臆病者は、征服王イスカンダルの侮蔑を免れぬものと知れ！」

そしてその英霊は現れた。
ライダーの挑発での直後に現界した。どうやらポールの上から見下す位置にいるようだ。
全身を覆う黄金の甲冑を抜きにしても放たれる絶対的な王気（オーラ）は、ただのサーヴァントとは明らかに一味も二味も違う風格を漂わせていえる。
そして気づく。この場にいる四人のサーヴァントのクラスと、明らかに狂ってない様子から、間違いなく該当するクラスはアーチャーだろう。

「我（オレ）を差し置いて”王”を称する不埒者が、一夜のうちに二匹も涌くとはな。」

そう切り出した黄金の英霊は侮蔑と不快さを全く隠さずに眼下のサーヴァントを見渡す。その正体はライダーやセイバーと同じ“王”であることがわかる。だが二人の王とは違い。無慈悲で冷酷さが口調に混じっていた。

それから難癖を付けたライダーと問答を始めたアーチャーだったが、突如として目線を別方向に向けた。
いや、アーチャーだけではない。その場にいたものが全員その方向へ目を向けた。向けた先には。
全身を漆黒の傷だらけのフルプレートに身を包んだ英霊がいた。

そして本能的にわかる。
あれは文字通り狂っている。狂戦士（バーサーカー）だと。
全身から漂う殺意は殺気というものがそのまま英霊になったのではと思える。

「いすかんだるさん。」

ここで空気になっていたシリアスブレイカー、玄武がライダーに話しかけた。

「あの人は勧誘しないのですかぁ？」
「誘おうにもなぁ。ありゃあ、のっけから交渉の余地なさそうだわなぁ。」

先程までに比べて明らかに積極性に欠ける発言だが、全員がライダーと同意見だった。……そもそも”アレ”に言葉は通じまい。

「で、坊主よ、サーヴァントとしてはどの程度のモンだ？　あれは。」

聖杯戦争ではマスターにはサーヴァントをサーヴァントとして見ることで対象のステータスを見ることができる。
ライダーのマスターであるウェイバーもその例に漏れず、その能力を持っており既にここまででアサシンと目の前のバーサーカーを除いた全てのサーヴァントのステータスを把握してた。
……が、彼はライダーの問いかけに答えられなかった。

「……判らない。まるっきり判らない。」

「なんだぁ？　貴様とてマスターの端くれであろうが。得手だの不

得手だの、色々と”観える”ものなんだろ、ええ？」

「あの“黒い霧”のせいじゃないでしょうかぁ。」

その言葉に全員バーサーカーを覆っている霧に目を向ける。
その全身を覆う霧状の影は、そもそもあのサーヴァントの姿を正確に捉えることさえ不鮮明にさせている。スキルか宝具かはわからないが、恐らく自身を隠蔽する能力だろう。実に厄介である。

突如登場したこの異様な狂戦士に、全員が警戒を緩めないが、ひとりだけ例外がいた。アーチャーだ。
理由はわからないがあのバーサーカーはでてきてからずっと自分に敵意を出していたのを黄金の英霊は気づいていた。

「誰に許しを得て我を見ているこの狂犬めが……。」

理性も無い獣（ケダモノ）が、不快な視線を自分に向けている。プライドの塊であるアーチャーからすれば、それは許し難い侮辱であった。

「せめて散り際にて我を興じさせよ。」

そしてアーチャーの声によって出現する宝槍と宝剣から発せられる膨大な魔力は、間違いなく宝具のそれだ。

「……ッ！」

誰かが息を呑む。巻き上げられた粉塵が晴れてくると、その人影はあった。
悠然と立つバーサーカー。その手にはアーチャーの射出した宝具である剣が握られており、

僅かに逸れた足元には宝槍が作ったクレーターが出来上がっている。恐らく今起きたことが理解できたのは、サーヴァントだけだろう。先の攻防でバーサーカーは、まず第一射の宝剣を”手で掴み取り”、続けて飛来する宝槍をその剣で迎撃したのだ。

「……奴め、本当にバーサーカーか？」

「狂化して理性を無くしてるにしては、えらく芸達者な奴よのぅ。」

ランサーとライダーが唸るが無理もない。

理性が無い筈のバーサーカーが神速で飛来する剣をとり、次いで来る槍を剣で弾いたのだ。

だがそれを射出したアーチャーは顔を怒りに染めていた。自身の宝を奪い今もなお立っている。バーサーカーの姿に憤怒を浮かばせている。

「――その汚らわしい手で、我の宝物に触れるとは……そこまで死に急ぐか、狗（いぬ）ッ！」

怒号と共に再びアーチャーの周りに宝具の群れが現れた。――その数、十六挺。

剣、槍、斧、槌、矛と、それら全てが紛れもない”宝具”だった。

「そんな、馬鹿な……。」

「ほぇ～。」

思わず声を漏らしたウェイバーと玄武だったが、他の者も内心は同じだろう。本来宝具はひとりの英霊に一つか二つ、多くても三つか四つが限度だ。切り札とも言える宝具をあれだけ所有し、なおかつ

なんの未練もなく放っていくなど異常としか言えない。
ちなみに玄武の思っていることは「武器マニアさんなんですねぇ。」だ。いささか緊張感が足りない。

「その小癪な手癖の悪さでもって、どこまで凌ぎ切れるか――――さぁ、見せてみよ！」

号令の下それぞれが膨大な魔力を持っている神秘の塊はバーサーカーに飛来する。
だが容赦のない攻撃でもバーサーカーは　は倒れない。何とバーサーカーは、最初と同様に飛来した矛を左手で掴み取ると、右手の剣と合わせて襲い来る宝具の一斉射撃を片っ端から撃ち落としているのだ。たった今奪い取った武器をまるで自分の体の一部のように使いこなすその腕は、正に神業としか言えないものだった。
バーサーカーは一体何スロットなんだ…？

「どうやらあの金ぴかは宝具の数が自慢らしいが、だとするとあの黒いヤツとの相性は最悪だな。」

瞠目している者たちの中で、ひとりライダーが余裕そうに呟く。

「黒いのは武器を拾えば拾うだけ強くなる。金色も、ああも節操なく投げまくっていては深みに嵌る一方だろうに。融通の利かぬ奴よのぅ。」

ライダーの言う通り、バーサーカーは強い宝具が飛来するたびそれを掴み取り迎撃している。そして遂にアーチャーの攻撃を凌ぎきったバーサーカーは、両手の曲刀と斧をアーチャー目掛けて投擲した。
切り裂いたのは、アーチャーの立っていた街頭のポールだった。足

場を無くしたアーチャーは難なく着地するが、その顔には先程以上の憤怒が浮かんでいる。

「痴れ者が……。天に仰ぎ見るべきこの我を、同じ大地に立たせるかッ。」

そして黄金の英霊の後ろの空間が歪む。

「その不敬は万死に値する。そこな雑種よ、もはや肉片一つ残さぬぞ！」

そこに現れたのは先ほどの倍はある宝具。もはや加減する気は失せたらしい。

異様な光景に全員が息を飲むが、不意にアーチャーが町の方向に視線を向ける。

「貴様ごときの諫言で、王たる我の怒りを鎮めろと？大きく出たな、時臣……。」

忌々しそうに舌打ちすると、展開されていた宝具が一斉に消える。どうやらマスターである遠坂時臣から帰還命令が出たらしい。既に殺意も失せたようだが、黄金の王はその傲岸さを隠さずに他のサーヴァントを見据える。

「雑種ども。次までに有象無象を間引いておけ。我オレと見まみえるのは真の英雄のみで良い。」

そう言い放つと、アーチャーは霊体化して引き上げていった。

「フムン。どうやらアレのマスターは、アーチャー自身ほど剛毅な

質タチではなかったようだな。」

苦笑するライダーだが、事態は好転していない。アーチャーは去っても、もうひとつの脅威――バーサーカーは健在なのだ。

そして当のバーサーカーは、突然獲物が去ったことで暫く所在無さげだったが、次なる標的を見定め猛烈な殺気を撒き散らし始めた。

その視線の先には――セイバー。

「……ａｒ（ァ）……ｕｒ（ァ）……ッ！！」

そしてバーサーカーは騎士王へ襲いかかった。

金ぴかですねぇ（後書き）

ファイ・ブレインのアナ・グラムがかわいすぎる。
アナかわいいよアナ

黒くて硬くておっきいです～（前書き）

諸君、私はアナ？グラムが好きだ。
諸君、私はアナ・グラムが好きだ。
諸君、私はアナ・グラムが好きだ。
横顔が好きだ。真剣な顔が好きだ。菓子を食べている様が好きだ。
アナは～という口調が好きだ。女性にしか聞こえない声が好きだ。
テレビで、ネカフェで、Ｙｏｕｔｕｂｅで、ニコニコ動画で、Ｐｉｘｉｖで、
この地上で放送されるありとあらゆるアナ・グラムが大好きだ。
真剣な顔で絵を描いているのが好きだ。
猫耳を装備し、カイトを元気づけようとしているのが好きだ。
女装大会で出場すらしていないのに優勝した時など感動すら覚える。
椅子に逆向きに座り「アナが思うに～」と言った時はもうたまらない。
天然で場を和ませるところも最高だ。
カイトが怪我をし、ノノハが落ち込んだ時アナが慰めたシーンなど絶頂すら覚える
シリアスが、滅茶苦茶にされるのが好きだ。
必死に守る筈だったアナたんコスプレ絵を蹂躙（犬にトイレがわりに）され、ゴミ箱に直行してしまうのは、とてもとても、悲しいことだ。
アンチオタクに追い回され、アナたんコスプレ絵ｍａｒｋ－２がとられるのは屈辱の極みだ。
諸君。私はアナを。極楽のようなアナ・グラムを望んでいる。
諸君、私と同じ同志諸君。
君達は何を望んでいる？
更なるアナたんハァハァを望むか？
戦闘力５３万の人も裸足で逃げ出す可愛いアナ・グラムを望むか？

魔法世界の神も吃驚する程のアナ・グラムを望むか？
「男の娘（アナ・グラム）！男の娘！男の娘！」
よろしい、ならば男の娘（アナ・グラム）だ。
我々は満心の力を込めて今まさに噴出せんとする鼻血（愛）だ。
だが、この暗い闇の底で（※布団）数年もの間引きこもっｔゲフン
ゲフン堪えてきた我々に
ただのアナ・グラムじゃ物足りない！！
萌えるアナ・グラムを！！
もっと萌えるアナ・グラムを！！
我らは僅かに一個大隊、千人にも満たぬ社会不適合者（敗残兵）に
過ぎない。
だが諸君は一騎当千の古強者だと私は信仰している。
ならば諸君と私とで百万と一人の軍集団となる。
我々を忘却の彼方へと追いやり眠りこけている連中（リア充）を叩
き起こそう。
髪の毛を掴んで引きずり下ろし、眼を明けさ思い出させてやる。
アナ・グラムには奴らの哲学では思いもよらない事がある事を思い
出させてやる。
一千人の強者の布教活動で、世界を萌やし尽くしてやる。
全エンジン、発動開始。布教バスアナ・グラム始動
エンジン全開！一番隊、二番隊乗り込み終了！！
「最後の三番隊、大隊指揮官より全バスへ。」
目標日本本土東京秋葉原！
第四次聖杯戦争……じゃなかった第一次布教作戦、状況を開始せよ。
行くぞ諸君。

黒くて硬くておっきいです～

～玄武～
あわわ……せいばーさんがぴんちです。
黒くて硬そうなおっきい人がああさあああ！って叫びながら攻撃してます。
あ、朝ってかんじなんでしょうかねぇ？今夜ですけどねぇ……。

「アァァァサァァァァァァァ！！」
「くっ……！」

おおおお、おされまくってます！どどど、どうしましょう！！
ギィン

「そこまでにしてもらう、バーサーカー。」

あ、らんさあさんが止めましたぁ。
よかったですよぉ～～。

「セイバーとは先約があってな。」
「ランサー……。」

なんででしょうかぁ、自殺しろ、ランサーって言いたくなりましたぁ……。
リア充滅んじゃえ。

『何をしているランサー。今がセイバーを倒す絶好の機会であろう。バーサーカーと共闘し、セイバーを倒せ。』
「セイバーは！必ずやこのディルムッド・オディナが誇りに懸けて

討ち果たします！！
お望みならそこな狂犬めも先に仕留めご来場に入れましょう。故にどうか、我が主よ！この私とセイバーの決着だけは尋常に…」
おお、騎士どーです……とりあえず殺し合う理由もなにかご褒美があるからだと思うんですよぉ。
ですがらんさあさんはそのご褒美はいらなさそうに思えますねぇ。
三度の飯より武なのでしょうか。やっぱり騎士どーは凄いで『ならぬ、ランサー。バーサーカーを擁護してセイバーを殺せ。令呪をもって命ずる。』
あ〃……？

黒くて硬くておっきいです～（後書き）

前書きェ……

次回とうとう玄武がキレます。

水銀なんてレベルを上げて物理で殴ればいい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6125z/

最硬の肉体を持つ一般人

2012年1月9日00時50分発行